CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

他者との関連における“自己”

—幼児の共感的行動に関して—

藤　井　洋　子
（幼児心理学研究室）

“Self” in Relation to Others : The Empathic Behavior in Preschool Children

Yoko FUJII

問　題

共感性（empathy）について，堀（1974）は，Dymond, R. F.（1948），Cottrell, L. S.（1949），Grossman, D.（1951）らの定義を概観して，「他者の立場に立って，感じ，考え，行動し，外界を知覚する能力」との定義づけを行っている。

共感性は，社会的な交渉の場において，円滑な対人行動（interpersonal behavior）を形成していくうえでの一つの社会的能力（social competence）である。その原初的な段階は，「子どもは，自分の世話をしてくれるおとな（母親）の気分に共感的に反応する。たとえば，母親が幸せにひたっているときには子どももそのように感じ，母親が不安になれば不安になる。このような母親の感情状態は，母親の身ぶりや声や表情などによって子どもに伝達される。」（Sullivan, 1940）というようなかたちで認められる。真の意味における共感性とは，自己と他者が明確に分化していることが前提条件であり，また，単に他者の感情，動機，考えなどについて認知することとは異なる。しかし，従来の研究についてみると，相手の感情の認知とそれに対する共感的反応とを区別する立場もあるが（Feshbach & Roe, 1968），他のほとんどの研究では両者を厳密に区別せず，相手の感情をどれだけ正しく認知できるかということがそのまま共感の指標としてつかわれてきているのが現状である（伊藤，1975）。

伊藤（1975）は，従来の研究で共感的行動が可能となる年齢についての見解が不一致である原因を考察して，共感の測定方法の相違（今井，1974）に加えて，研究の対象とされる共感の発達水準が必ずしも同じでないことを指摘し，つぎの3つの水準を提示している。

第1水準：他者の感情状態への反射的な共感。

第2水準：同一視（identification）や投影（projection）に基づく他者への共感。

第3水準：自他の立場の相対的把握に立ったうえでの共感。

以上3つの発達水準のうち，本研究で対象とする共感的行動は第2水準である。

一般的に，他者の情緒は外的状況や顕型としての行動（表情・身ぶり・音声など）を手がかりとして判別される。今井（1974）は，従来の研究で用いられてきている共感的行動（簡単な具体的場面を描いた絵物語の主人公の感情状態についての認知）の2種の測定方法，すなわち，直接的な言語報告に基づく方法と，情緒の顕型である表情図版を使用する非言語的方法とを比較対照することによって，幼児・児童の共感性の検討を行った。その結果，後者の場合に高い共感性が認められ，幼児期の共感的行動を非言語的方法（表情図版）で把握することの有効性が示唆されている。今井（1974），今井・桶本（1973）らは表情図版に情緒表出的意味（うれしい・悲しいなど）をラベリングしているが，現実の場面では，情緒の元型（内的状況）と顕型（表情）のあいだにいつも対応関係が認められるとは限らない。また，星野（1969）によれば，幼児期においては表情の認知に際して，情緒表出的応答よりも活動表出的応答（笑っている・泣いているなど）が優位である。

以上の考察に基づき，本研究では，測定尺度としての表情図版を活動表出的水準で意味づけ，従来の研究（今井，1974；今井・桶本，1973；Borke，1971；Feshbach & Roe，1968）で比較的共感が容易とされた“喜び”(元型）について，顕型が元型と一致しやすい単純事態と，必ずしも一致するとは限らない複雑事態の２つの状況におけるストーリーを設定して，幼児の共感的行動を検討する。

具体的な検討内容は，つぎのとおりである。

１．“喜び”の情緒に関して，単純事態と複雑事態の２つの状況における共感的行動に相違が認められるか，その際，性や生活年齢の要因が関与しているか。

２．複雑事態においては，類似した別の状況におけるモデル（主人公の母親）の表情（示範内容）を観察することによって，共感的行動がどのような影響（示範効果）を受けるか，性・生活年齢・示範内容の要因により相違が認められるか。

方　　法

〈被験児〉　保育所男児78名，女児65名，計143名（生活年齢３歳２カ月～６歳２カ月）。

〈実験材料〉　１．表情図版（反応図版）：直径６cmの厚紙製で，笑っている顔（笑），泣いている顔（泣），怒っている顔（怒），何もしていない普通の顔（普）の４種類である（以下，各図版を笑，泣，怒，普と略す）。

２．刺激図版：縦19cm，横26cmの厚紙製で，男女児用（図版の主人公の性と被験児の性が同一）各４種類，計８種類である。図版の種類とその内容については，つぎのとおりである。

ⓐ単純図版……誕生日に両親からお祝をしてもらった主人公。

ⓑ複雑図版……ボートで川に流されてしまった小犬と再会する主人公。

ⓒ示範図版……ボートで川に流されてしまった主人公と再会する母親。

ⓓ母子図版……手をつないでいる主人公と母親。

単純図版，複雑図版および示範図版は，ストーリーの起・転・結を示す３枚の絵から構成されており，３枚目の顔（主人公あるいは母親）の部分が白ぬきの円（直径６cm）になっている。

母子図版は，主人公と母親のいずれの顔も白ぬきの円になった１枚の絵であるが，母親の特定の表情に対して主人公の表情をどのように仮定するかということで，母親に対する一般的な反応傾向を測定する目的で施行する。

なお，単純図版と複雑図版の妥当性については，短大生45名を対象とした予備調査（質問紙調査）の結果，単純図版では笑反応が多く（笑…91.1%，普…8.9%），複雑図版では笑反応と泣反応に分散して（笑…60.0%，泣…40.0%），両図版間に反応差が認められた($\chi^2=11.79$ $df=1$，$p<.001$)。また，複雑図版については，80%の者が笑と泣の二面性を認めている。

〈手続〉　１．表情認知：表情図版の意味を確認させる。普でのみ正反応が得られない場合はその意味を教示するが，笑・泣・怒のうち１つでも正反応が得られない場合は，４種類の表情図版について改めて選択肢（笑っている顔・泣いている顔・怒っている顔・何もしていない普通の顔）による反応を求める。

２．単純図版施行：図版の３枚目における主人公の表情を表情図版の中から選択して，主人公の顔（白ぬきの円）の部分に置くように教示する。

３．複雑図版施行（Ⅰ）：単純図版の場合と同様に主人公の表情を選択させる（反応Ⅰ）。

４．示範図版施行：複雑図版施行（Ⅰ）の被験児の反応（反応Ⅰ）に応じて，実験者が図版の３枚目における母親の顔（白ぬきの円）に表情図版を提示する。反応Ⅰが泣の場合は母親の表情を笑とし，その他の場合は母親の表情を泣とする。

５．示範の言語化：提示された母親の表情を言語化させる。

６．複雑図版施行（Ⅱ）：再度，主人公の表情を選択させる（反応Ⅱ）。

７．母子図版施行：母親の表情を順次提示して（４種類），それぞれに対する主人公の表情を選択させる。

〈実験時期〉　1981年６月

結　果　と　考　察

１．表情認知について

４種類の表情認知については，いずれの表情においても性差は認められない（表１）。また，年少児（平均年齢３歳10カ月，年齢範囲３歳２カ月～４歳４カ月）と年長児（平均年齢５歳７カ月，年齢範囲５歳０カ月～６歳２カ月）の比較では，いずれの表情においても生活年齢差が認められ，年長児は年少児よりも正反応が多い（表２）。

２．単純事態と複雑事態の２つの状況における共感的行動について

単純事態と複雑事態について，表情認知が不能であった者などを除いた男児68名，女児58名，計126名（内，年少児48名，年長児45名）の反応を検討した（表３・表

4・表5・表6・表7）。

表3から明らかなように，単純事態では㊝反応が77.8％であるのに対して，複雑事態では㊝・㊜・㊟に分散し，両事態間に反応差が認められた。このことから，情緒の元型は同じ“喜び”であっても，状況によっては共感的行動に相違が認められることがわかる。

生活年齢差については，単純事態において年少児と年長児の反応に相違が認められ，年長児では㊝反応が88.9％で予備調査で得た短大生の結果に酷似した共感性が認められるが，年少児では反応が若干分散している（表5）。また，表7より，複雑事態においては生活年齢差は認められず，その反応は同様な傾向で分散していることがわかる。

なお，性差については，両事態ともに認められなかった（表4・表6）。

表1　表情認知（性別）

表情図	性	反応 ○	△	×	計	検定
㊝	男	61	12	4	77	$\chi^2=0.91$
	女	50	9	6	65	$df=2$
	計	111	21	10	142	$n.s.$
㊜	男	52	22	3	77	$\chi^2=1.80$
	女	43	16	6	65	$df=2$
	計	95	38	9	142	$n.s.$
㊟	男	63	12	2	77	$\chi^2=3.70$
	女	46	13	6	65	$df=2$
	計	109	25	8	142	$n.s.$
㊞	男	6	0	71	77	$\chi^2=2.94$
	女	1	0	64	65	$df=1$
	計	7	0	135	142	$n.s.$

注）　○：正反応，△：選択肢正反応，×：認知不能　なお，㊞については手続上，選択肢正反応の場合も認知不能とみなす。

表2　表情認知（生活年齢別）

表情図	生活年齢	反応 ○	△	×	計	検定
㊝	年少	36	16	8	60	$\chi^2=18.31$
	年長	45	2	0	47	$df=1$
	計	81	18	8	107	$p<.001$
㊜	年少	30	23	7	60	$\chi^2=10.83$
	年長	38	9	0	47	$df=1$
	計	68	32	7	107	$p<.001$
㊟	年少	34	19	7	60	$\chi^2=15.84$
	年長	43	4	0	47	$df=1$
	計	77	23	7	107	$p<.001$
㊞	年少	1	0	59	60	$\chi^2=5.31$
	年長	6	0	41	47	$df=1$
	計	7	0	100	107	$p<.05$

注）　記号の意味，その他については，表3と同一。

表3　単純事態と複雑事態における反応

図版	反応 ㊝	㊜	㊟	㊞	計	検定
単純	98	4	4	20	126	$\chi^2=59.21$
	(77.8)	(3.2)	(3.2)	(15.9)	(100.1)	$df=3$
複雑	42	43	7	34	126	$p<.001$
	(33.3)	(34.1)	(5.6)	(27.0)	(100.0)	
計	140	47	11	54	252	

注）　セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

表4　単純事態における反応（性別）

性	反応 ㊝	㊜	㊟	㊞	計	検定
男	51	0	3	14	68	$\chi^2=0.66$
	(75.0)	(－)	(4.4)	(20.6)	(100.0)	$df=1$
女	47	4	1	6	58	$n.s.$
	(81.0)	(6.9)	(1.7)	(10.3)	(99.9)	
計	98	4	4	20	126	

注）　セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

表5　単純事態における反応（生活年齢別）

生活年齢	反応 ㊝	㊜	㊟	㊞	計	検定
年少	31	3	3	11	48	$\chi^2=7.60$
	(64.6)	(6.3)	(6.3)	(22.9)	(100.1)	$df=1$
年長	40	0	0	5	45	$p<.01$
	(88.9)	(－)	(－)	(11.1)	(100.0)	
計	71	3	3	16	93	

注）　セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

表6　複雑事態における反応（性別）

性	反応 �笑	㊤	㊒	㊥	計	検定
男	20	24	4	20	68	$\chi^2=1.09$
	(29.4)	(35.3)	(5.9)	(29.4)	(100.0)	$df=3$
女	22	19	3	14	58	$n.s.$
	(37.9)	(32.8)	(5.2)	(24.1)	(100.0)	
計	42	43	7	34	126	

注）　セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

表7　複雑事態における反応（生活年齢別）

生活年齢	反応 ㊤笑	㊤	㊒	㊥	計	検定
年少	15	18	5	10	48	$\chi^2=1.68$
	(31.3)	(37.5)	(10.4)	(20.8)	(100.0)	$df=3$
年長	16	15	2	12	45	$n.s.$
	(35.6)	(33.3)	(4.4)	(26.7)	(100.0)	
計	31	33	7	22	93	

注）　セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

3．複雑事態における共感的行動への示範効果について

主人公に対する共感的行動が，類似した状況（示範図版）におけるモデル（主人公の母親）を観察することによってどのような影響を受けるかについて（表8），性・生活年齢・示範内容（手続4におけるモデルの表情）の要因から検討した（表9・表10・表11）。

表8　観察の前後における反応

観察前＼観察後		反応II ㊤笑	㊤	㊒	㊥	計
反応I	㊤笑	24	10	4	4	42
	㊤	21	11	4	7	43
	㊒	5	0	2	0	7
	㊥	16	5	2	11	34
計		66	26	12	22	126

表9　示範効果（性別）

性	示範効果 有	不明	無	計	検定
男	21	25	22	68	$\chi^2=2.08$
女	15	17	26	58	$df=2$
計	36	42	48	126	$n.s.$

注）　有：反応IIが示範内容と等しい，無：反応Iと反応IIが等しい，不明：反応IIが反応Iおよび示範内容と異なる。

表10　示範効果（生活年齢別）

生活年齢	示範効果 有	不明	無	計	検定
年少	11	18	19	48	$\chi^2=2.83$
年長	15	10	20	45	$df=2$
計	26	28	39	93	$n.s.$

表11　示範効果（示範内容別）

示範内容	示範効果 有	不明	無	計	検定
㊤笑	21	11	11	43	$\chi^2=13.24$
㊤	15	31	37	83	$df=2$
計	36	42	48	126	$p<.01$

表9・表10より，性および生活年齢の要因による相違は認められない。示範内容の要因については相違があり，㊤笑条件では示範効果が認められやすいが，㊤条件では認めにくい（表11）。母子図版において，母親の表情が㊒の場合はその特質上主人公の表情を一致させる者（36.5%）のほかは㊤反応が42.9%で高率を示しているが，㊤笑反応の場合は一致反応が54.8%と過半数，㊤と㊥の場合はそれぞれ一致反応と㊤笑反応がともに30%台と，幼児の快感情への志向傾向が認められる（表12）。また，示範効果のあった者の場合は，母子図版において母親（ただし，示範内容のみで㊤笑あるいは㊤）と主人公の表情を一致させ，逆に示範効果のない者の場合はその反対の傾向にある（表13）。そうした結果を考え合わせると，母親の特定の表情に対して個人に感受性の相違があることが推察され，母親の快感情（顕型）に対してはそれを認知し共感的行動をとることが容易であるが，不快感情（幼児の理解上のもので，元型は快であるが顕型から不快と

判断されている）については，何らかのかたちで防衛機制が作用していることが示唆される。

表12　母子図版における反応

母	主人公 笑	主人公 泣	主人公 怒	主人公 普	計	検定
笑	69 (54.8)	19 (15.1)	11 (8.7)	27 (21.4)	126 (100.0)	$\chi^2=63.59$ $df=3$, $p<.001$
泣	41 (32.5)	48 (38.1)	17 (13.5)	20 (15.9)	126 (100.0)	$\chi^2=22.38$ $df=3$, $p<.001$
怒	7 (5.6)	54 (42.9)	46 (36.5)	19 (15.1)	126 (100.1)	$\chi^2=46.76$ $df=3$, $p<.001$
普	43 (34.1)	15 (11.9)	18 (14.3)	50 (39.7)	126 (100.0)	$\chi^2=29.49$ $df=3$, $p<.001$

注）セル内は実数，（　）内は百分率を示す。

表13　母子反応と示範効果の関連

示範効果	母子反応 一致	母子反応 不一致	計	検定
有	23	13	36	$\chi^2=7.72$
無	16	32	48	$df=1$
計	39	45	84	$p<.01$

春木（1982）は，表情・身ぶり・しぐさなどの言語によらないコミュニケーション，すなわち，ノンバーバル・コミュニケーション（nonverbal communication）を含むノンバーバル行動の研究について図1のような位置づけを行っている。

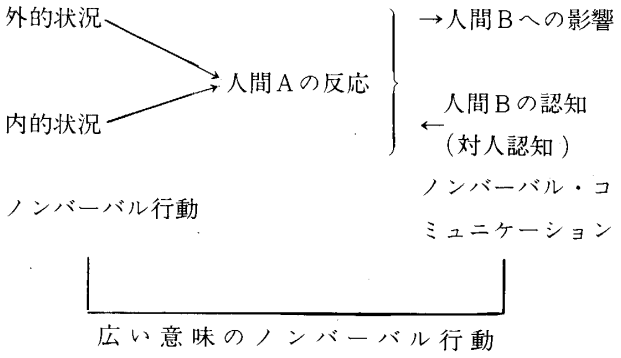
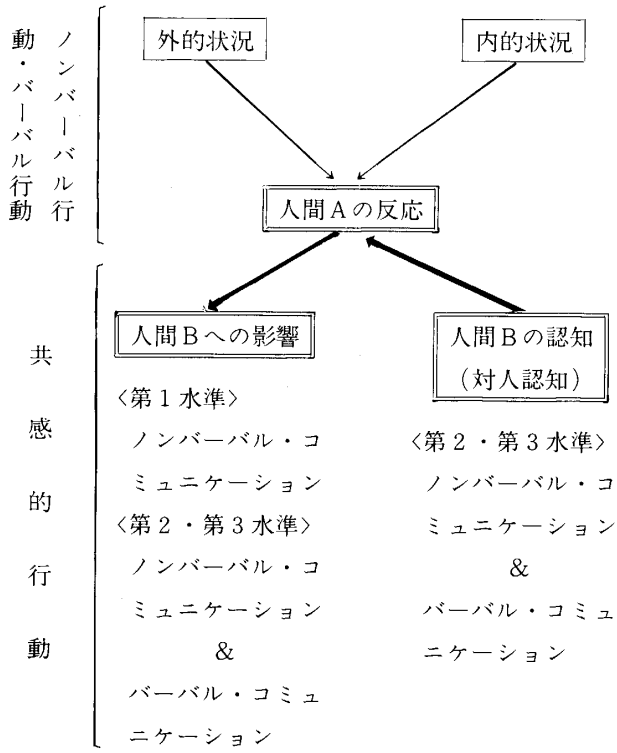


図1　ノンバーバル行動の研究（春木，1982）

狭義のノンバーバル行動とは，ある人間Aをとりまく外的状況（物理的・社会的状況）またはAの内的状況（意識または感情）に対する反応の全体であり，つまり人間の行動の問題である。一方，ノンバーバル・コミュニケーションは，そのような現象を起こしているAを目の前にした人間BがAから受ける影響，およびBがAの反応からAの状況（外的・内的状況）をどのように認知するかについての問題である。

そうしたノンバーバル行動およびバーバル行動との関連から，問題で示した共感的行動の3つの発達水準をとらえなおすと図2のように表現できよう。



注）　第1水準：他者の感情状態への反射的共感，第2水準：同一視や投影に基づく他者への共感，第3水準：自他の立場の相対的把握に立ったうえでの共感。

図2　共感的行動とノンバーバル行動・バーバル行動の関連

図2についていえば，ある人間Aをとりまく外的状況あるいは内的状況に対して，Aはノンバーバルな行動およびバーバルな行動を生起させる。そのようなAの行動を目の前にした人間BがAから受ける影響（Bへの影響），またはBがAの反応およびAの状況（外的・内的状況）をどのように認知するか（Bの認知）ということが，Aに対するBの広い意味での共感的行動である。ただし，Feshbachら（1968）が指摘するように厳密な意味での共感的行動は，他者の感情状態を認知することとは区別する必要があり，Aについての単なる「Bの認知」ではな

く，そうした認知に基づく「Bへの影響」であるといえる。

「Bへの影響」には3つの水準があり，まず第1水準の共感（他者の感情状態への反射的な共感）はまさしくノンバーバル・コミュニケーションによるもので，たとえば，先にあげた言語に依存しない子どもの母親に対する共感（Sullivan, 1940）がその例である。本研究で用いた母子図版（母親の特定の表情に対して主人公の表情をどのように仮定するかということで，母親に対する一般的な反応傾向を測定）は，かたちとしては同一視や投影に基づいているが（第2水準），本質的には第1水準の共感に関与しており，ノンバーバル・コミュニケーションの領域にある。最近の乳児の母子関係の分析においては，微笑という表情が相手に快い感じと接近を引き起こす強い刺激であり，逆にしかめ面は他者に回避行動を起こさせることが明らかにされている（春木，1982）。そうした観点から，母子図版に関して得られた幼児の㊒反応への志向傾向は，母親の表情に対する反射的共感（母親と主人公の表情の一致反応）とともに興味深い（表12）。第2水準の共感（同一視や投影に基づく他者への共感）および第3水準の共感（自他の立場の相対的把握に立ったうえでの共感）では，言語的なものと非言語的なものが単独あるいは交錯したかたちで，すなわち，ノンバーバル・コミュニケーションとバーバル・コミュニケーションの両者がかかわりあっている。今回とりあげた複雑事態に類似した状況（示範図版）において，母親のノンバーバル行動（表情）を観察することによって観察の前後で主人公の表情認知（複雑事態）に変容が認められるか否かについての問題は，主人公とその母親に対する被験児とその母親の同一視や投影の機制が作用した共感的行動の検討であり，第2水準の「Bへの影響」をとりあつかったものである。

「Bの認知」では，第2水準と第3水準の共感が関連しており，いずれもノンバーバル・コミュニケーションとバーバル・コミュニケーションが単独あるいは交錯したかたちで機能する。本研究の単純事態と複雑事態の2つの状況（外的状況）における主人公の表情認知（Aの反応についての認知）は，同一視や投影の機制が作用した第2水準における被験児の共感的行動の検討であり，「Bの認知」についての問題である。

以上，ノンバーバル行動およびバーバル行動との関連で，本研究で対象とした共感的行動についての把握を試みた。自己と他者が明確に分化しているか否かを問わず，すなわち，伊藤（1975）が指摘した共感的行動の発達過程における3つの水準のいずれにおいても機能しているノンバーバル・コミュニケーションについての検討は，今後の研究課題として興味深い。

要　約

本研究の目的は，“喜び”の情緒に関して，元型（内的状況）と顕型（表情）が比較的一致しやすい単純事態と必ずしも一致するとは限らない複雑事態における幼児の共感的行動について検討し，さらに，複雑事態においては，示範効果との関連で分析することである。

そのため，保育所児143名を対象として，2つの状況における各ストーリーの起・転・結を示す3枚の絵から構成した刺激図版に対する主人公の表情図版（㊒・㊜・怒・普）を選択させた。また，複雑事態においては，類似した別の状況における主人公の母親の表情を観察させた後，再び主人公の表情の選択を求めるという手続をとった。さらに，母親に対する一般的反応傾向を測定するために，母子図版（母親の4種類の表情に対する主人公の表情選択）を施行した。

おもな結果は，つぎのとおりである。

1．単純事態と複雑事態の2つの状況における共感的行動について

a．単純事態においては㊒反応が多いが，複雑事態においては㊒・㊜・普と分散して，2つの状況での共感的行動に相違が認められる。

b．単純事態において，年長児は㊒反応が多く年少児では反応が若干分散して生活年齢差が認められるが，複雑事態においては，年長・年少ともに同様な傾向で反応が分散して相違が認められない。

c．2つの状況のいずれにおいても，性差は認められない。

2．複雑事態における共感的行動への示範効果について

a．共感的行動に対するモデル（主人公の母親）の観察の影響（示範効果）について，モデルの表情（示範内容）による相違があり，㊒条件では示範効果が認められやすいが，㊜条件では認められにくい。

b．示範効果が認められた者の場合は，母子図版においてモデル（ただし，示範内容のみ）と主人公の表情を一致させ，効果のない者の場合は，その反対の傾向が認められる。

c．性および生活年齢の条件による示範効果の相違は認められない。

〈付記〉　本研究の一部は，中国四国心理学会第37回大会で報告したものである。なお，常に有益な御助言をいただく兵庫教育大学浜名外喜男助教授，大手前女子大学武衛孝雄教授に深く感謝いたします。

文　献

Borke, H. 1971 Interpersonal perception of young children : Egocentrism or empathy ? *Developm. Psychol.*, 5, 263－269.

Cottrel, L. S., & Dymond, R. F. 1949 The empathic response : a neglected field for research. *Psychiatry*, 12, 355－359.

Dymond, R. F. 1948 A preliminary investigation of the relation of insight and empathy. *J. consult. Psychol.*, 12, 228－233.

Feshbach, N. D., & Roe, K. 1968 Empathy in six and seven-years olds. *Child Develpm.*, 39, 133－145.

Grossman, D. 1951 The construction and validation of two insight inventory. *J. consult. Psychol.*, 15. 109－114.

春木　豊　1982　ノンバーバル行動とは何か—人間の行動学の観点から—．サイコロジー，3，10．サイエンス社，24－29.

堀　洋道　1974　対人行動と社会的技能．斉藤耕二．菊池章夫（編），ハンドブック社会化の心理学．川島書店，209－223.

星野喜久三　1969　表情の感情的意味理解に関する発達的研究．教心研，17，2，26－37.

今井靖親・桶本真也　1973　幼児の共感性に関する実験的研究．奈良教育大学紀要，22，1，185－192.

今井靖親　1974　幼児・児童における共感性の発達．奈良教育大学紀要，23，1，231－238.

伊藤秀子　1975　共感の発達心理．春木　豊・岩下豊彦（編），共感の心理学．川島書店，37－64.

Sullivan, H. S. 1940 *Conceptions of modern psychiatry.* New York : Morton.

（昭和58年1月25日受理）